

扉を開く

INTERVIEW

開く

九州国立博物館館長

三輪嘉六

Karoku Miwa

古代には大和王朝の機関・大宰府が置かれ、山上憶良や大伴家持も勤務したあたりに、平成十七年、九州国立博物館が誕生した。アジアの影響が色濃く、西洋の文化も最初に流入してきたという九州の特性を生かしながら、市民と共に繁栄する博物館を目指して、個性的な活動を展開している。館長の三輪嘉六氏は設立準備室時代から新しい博物館づくりに関わってきた人物。市民と共生する博物館の在り方について語っていただいた。



源平壇ノ浦合戦

大和 中村 信壽

誇るべき日本の伝統と

ボランティアから生まれる 新しい文化を大切に

予想をはるかに超える入館者数

——九州国立博物館は開館以来の入館者数が予想をはるかに超え、大変な人気と伺っております。

三輪 おかげさまで七一五万人（取材当時）の入館者をお迎えしています。開館当初はどこも混み合うものですが、その後も急に落ち込むこともなく、順調に推移しています。特に昨年夏開催した「国宝阿修羅展」は七〇万人以上の方にご覧いただきました。これまで九州で行われた展覧会で一番入場者数が多かったのは昭和四十年代の「ツタンカーメン展」でしたが、それでも五八万人。それをはるかに超えましたね。

——長い列ができて入場できるまでに数時間かかったとか。

三輪 夏の炎天下、三〜四時間もお待ちいただいた日もありました。ご覧いただけるのは流れの中で一五〜二〇分ぐらいだったのですが……。この光景を見て、私は九州の文化力の高さを痛感しました。九州で整然と並んで電車に乗る姿をあまり見たことがなかったのに（笑）、文句一つなく、整然と並んでくださって。わくわくしながら待つていらつしやるのが表情からも感じられました。

——ツタンカーメンを^み観に五八万人来ると、阿修羅像を^み観に

七〇万人が来ると、動機が違ような気がします。何か精神的なものを現代人は求めているのではないのでしょうか。

三輪 確かに私も現場におりまして、皆さんが心の豊かさを求めているということを非常に感じました。よく「モノの豊かさより心の豊かさ」などと申しますけれ

ど、それ以上に、真の心の豊かさを求めているらつしやる。一〇回も通ったというケースがありましたね。予めそのためのお金をちゃんと用意して通われたんです。

若い人も多かったですね。「何かを求めたい」という気持ち若者にも強い。もちろん、阿修羅像の持つ独特の雰囲気にも与^{あそ}りたいということもあったでしょう。印象的だったのは、「いつ観ても飽きない」という感想が聞かれたこと。さまざまな年代の方が同じような感想を述べておられました。

市民の支援を受けて誕生した博物館

——開館後も継続して入館者を集めている背後には、相当なご努力もあったのではないのでしょうか。

三輪 私の努力というよりもスタ

ッフみんなの努力ですね。また、市民の支えが非常に大きかったです。私はこれからの文化は市民とどのように共生するかによって繁栄の度合いが左右されると思っ

ています。「そういう在り方の見本をぜひここで創^{つく}りたい」という発想で運営^{えいぎや}してきて、その成果が出たということでしょう。

既存の博物館や美術館にその発想がなかったというわけではありません。しかし、本当に地域に密着しながらやるというのはなかなか難しく、挫折^{さつそく}しているところも多いと思います。また、住民不在のまま予算が組まれ、ついピカソやゴッホを目玉に人を集めようという発想になってしまい、一時は賑^{にぎ}わつてもやがては入館者が激減^{げきげん}してしまうところもありました。

それならここで、かねてみんながやりたいと思っていながらやれなかったことに最初から取り組んでみようと考えたわけです。新しい博物館で何もかも最初からやるわけですから、しがらみがない。これは大きなメリットだと私は思いました。開館準備から担当しておりましたので、準備室時代から「市民と共に歩むとはどういうことか」を考え、それを一つのテーマに掲げてやってきました。建物を造るときからそのテーマを考え

続けてきたとも言えます。

一例を挙げれば、従来のやり方だと、工事中は当たり前のようにブルドーザーが工事現場を走り回る、あるいはコンクリートミキサー車が住宅街を含む周辺地域を走るものです。いくら博物館がほしいと思っている住民であつても、二年もの間騒音や埃^{ほこり}に悩まされたのでは嫌な気持ちになるに違いありません。そこでまず工法から協力してもらいました。この土地の中で土砂を切り崩し、それを盛る、という具合に、敷地の中でできるだけ工事を収めてしまうように工夫してもらいました。

また、国立博物館でありながら市民の方にも寄付をお願いしました。建設費の一割ほど寄付を頂き、県も四〇%出す。国も五〇%出す。国から、そういう形であれば創^{つく}って良いと言われましたので(笑)。一割とは四〇億円ほどです。それを当地太宰府だけでなく九州一円の八万人と企業一〇〇〇社のご協力で集めていただきました。するとその方たちが参加意識を持つんですね。それがとても大きい。私が準備室時代のことですが、

タクシーに乗ったら、運転手さんが、「私はあの博物館に二〇万円寄付しました」とおっしゃるんです。バブルがはじけてリストラも始まっていたころのことで、「私は前の会社で整理されたんだけれど、現職の時に二〇万円寄付したんだ」と。それを誇りに思ってください。また、博物館に通じるトンネルのあたりで、親子連れの家族が「あそこの窓のあたりはお父さんが寄付したんだ」と子供に話

しかけていらつしやるのも目撃しました。そんな参加意識を大事にしていきたいですね。国立博物館だからといって、勝手に存在しているわけじゃない。地域の文化的景観になることを目指したい。まだ途上ではありますが、背景に大きな市民パワーが存在していなければいけないと思っています。最初に申し上げた七・五万人という数字は、この理念を追求してきた結果だと思っています。

文化的ボランティア活動の可能性

——こちらではボランティアの方がとても多いですね。

三輪 常時三〇〇人ほどの方に働いていただいています。日本の博

物館の中で一番多いはず。ボランティアは阪神淡路大震災で注目されましたが、今でも災害や福祉系の分野が多く、文化的ボラン



ロビー天井の構造材は九州各地の木材を利用。後ろに見えるのは博多の「山笠」の一つ。



みわ・かるく ● 1938 年岐阜県生まれ。日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同文化財鑑査官、日本大学教授、九州国立博物館設立準備室長を経て、2005 年 4 月より現職。文化審議会文化財分科会専門委員、独立行政法人評価委員会委員（文化分科会）をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員を務める。1999 年には文化財保存修復学会会長に就任。専門は考古学、博物館学、文化財学。

ティアに携わる方は少ないんです。ここで三〇〇人の方が活動されているのは、やはり市民参加型の博物館であろうという理念の表れですね。その代わり、私どももボランティアから生まれる新しい文化を大事にしていく。一緒にあって創っていくという考え方です。そこで、ボランティアの方々の活動拠点も、よくあるように倉庫の片隅に部屋を作るのではなく、一番良い場所にきちんとした部屋を用意しました。広くて、明るい部屋です。館長室より良い場所にあるかもしれません（笑）。別に格好良い気配りをしたわけではなく、新しい文化的な形態を

ひ生み出そうと。私がよく言うのは、「学校より面白く、教科書よりも分かりやすく」。未来の大人である子供に向けて、あるいは市民に向けて、そういう方向付けをしていきたい。よく新しい取り組みをしていると言われますが、別に特別なことをしている意識はないのです。地域と一体になるということも大切に考えています。この博物館は、もともと太宰府天満宮が持つておられた広大な山を寄附していただいで建てられたものです。近くには観世音寺や大野城という歴史ある寺社や遺跡もある。このような伝統ある環境の中にうまく位

置しておりますので、私たちも文化的な環境として一体化していきたいと願っています。

—— ボランティアの方はどのような役割を果たしていらっしゃるのでしょうか。

三輪 入館者のご案内や英語・韓国語・中国語の通訳、ハンディのある方のお手伝いなどさまざまです。特にハンディのある方のお手伝いについては非常に大事に考えております。まだ至らない点も多いのですが、今後も充実させていきたいですね。例えばハンズオンという、触ってみられるコーナーをもっと工夫したい。最初は子供向けにハンズオンを増やそうと考えていたのですが、入館者の中に視覚障害者の方がたくさんいらっしゃることに気付いたのです。視覚障害者を対象とした展示の資料や案内のご用意については、盲導

教育活動にも新機軸を打ち出す

—— 教育面でも工夫していらっしゃることはあるのでしょうか。

三輪 国立博物館は、昭和二十六年にできた博物館法やその前年に

犬への配慮とかさまざまな対応が必要ですが、まだ不足していますね。具体的に申せば、盲導犬用のトイレも未整備なのです。視覚障害がある方でも、想像で補いながら博物館を楽しんでいただけるように考えていかねばなりません。

私どもが気付かない点を指摘してください。阿修羅展のとき、あまりに混み合って障害者の方に気の毒だということで、ご本人と付き添い一名の方に限ってご覧いただける日を一日設けました。告知が足りなくて、後から「知らなかった」という声もたくさん頂きました。何分初めての取り組みでしたので、積み重ねを大事にしていきたい。分かりやすく言えば、すべての人にやさしい博物館でありたいですね。

制定された文化財保護法を尊重しながら運営されてきました。同法では文化財の保存、文化財との共生を博物館の大事な目的と定めて



普段は入ることができない博物館の裏側を、館内案内ボランティアの案内によって見学できる「バックヤードツアー」を開催（予約制）。文化財を守る大切さを、免震層や収蔵庫、文化財保存修復施設の見学を通して体感できる。展示室だけでなく、広く博物館の活動に理解を深めてもらうことが狙いという。

います。もちろんこれは大きなテーマです。ただ私は日本の博物館がもっと力を入れるべきなのは「教育」だと思うのです。従来、博物館の中の学習の場所と言えば会議室の奥の方とか地下室の裏手に追いやられていましたが、それではいけない。うちは新しい博物館なので、ほかができないこともやってみようと思っています。

正面の入り口を入ってすぐに「あじっば」という施設があります。「異文化体験」を前面に出して、「いろ」「かたち」「もよう」「におい」を五感で楽しむことを通じてアジア各国が持つ独自文化を少しでも体験してもらえ、施設として考えました。アメリカの「チルドレン・ミュージアム」を多少モデルにしていますが、今後はもっと特徴あ



アジア各国が持つ独自の文化を、五感を通して体験できる「あじっば」は子供に大人気。

る施設にしていきたいですね。ここは無料ゾーンにありますので、よく子供たちが誘い合わせて放課後や休日によつてきます。

実は博物館の定礎の文字を書いてくれたのも地元の子供なんです。近くにある太宰府中学の生徒さんです。子供たちを大事にしていくんだ、そして勝手な博物館運営に走らないようにするのだという戒めの象徴が、あの定礎なのです。

外国から来る人たちにもワークショップを体験してもらっています。九州は古来アジアと結び付きの強い土地です。それを生かした博物館でありたい。事実、アジアのお客様が増えています。

——ロビーは非常に大きな吹き抜けとなっていますね。

三輪 今は博多の「山笠」が飾られています。あれは高さがありますからね。祭りの時と違って前後左右すべての角度から見られると、喜ばれています。これだけ大きくて、しかも外気からちゃんと遮断される場所はそうあるものではない。この空間をどのように活用していくか、非常に大事だと思っています。ベートーヴェンの第九交響曲を合唱したこともあるんですよ。

——二〇〇八年には日中韓の首脳会談が行われました。

三輪 おっしゃるとおりです。ここをパーティーに使ってくださいってもいい。欧米ではプライオリティーの高いパーティーを博物館で開くことが当たり前になっています。日中韓首脳会談にしても、日本のアイデンティティーをしっかりと出すという効果があったと思います。お互いの文化がこんなに共存共栄しながら影響し合ってきたのだと、会議の場で改めて説明しなくてもわかっていただける空間ですから。私たちもどんな提案をしていって、多目的に使いたいですね。

——お話を伺っていて、文化財というのは実に多様な味わい方、楽しみ方、活用の仕方などがあって、当博物館では地域の人と連携しながら、できるだけ幅広いニーズに添えていこうとされていると感じました。最後に読者に一言メッセージをお願いいたします。

三輪 東京国立博物館は総合的な日本文化を、京都国立博物館は都の雅な文化を、奈良国立博物館は仏教文化や仏教芸術の紹介をそれぞれコンセプトとして運営されています。九州はアジアのクロスロードです。また日本が西洋とまず最初に接触したのも九州。キリスト教も鉄砲も、ここから入ってきました。そういう地理的な要素もしっかり受け止めつつ、独自の活動を展開していきたいですね。そこで九州国立博物館は、「アジアをはじめとする海外の影響を色濃く受けつつも独自の文化を育ててきた日本」をコンセプトに、さまざまな企画を取り上げていこうと考えています。全国からたくさんの方がおいでくださることをお待ちしております。